

倫 理

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和 6 年度（第 4 回）共通テストの「倫理」の問題作成の方針は次のとおりである。「人間としての在り方生き方に関わる倫理的課題についての多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方や手がかりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。」

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14 ページに記載の 8 つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

第 1 問 源流思想の中の比喩や例えについて（源流思想）

高校生の会話を基に、思想の中の比喩や例えに着目して多面的・多角的に考察させる大問である。会話文と設問との関連はやや弱い。おおむねバランスよく出題され、知識・理解と資料読み取りを組み合わせさせて考えさせる工夫もあり、「倫理」の問題として適切であった。出題内容はおおむねオーソドックスだが、全体的に原典資料の量が多く、読み取りの効率で差がついたかもしれない。教科書で扱いの少ない事項が出題されている箇所、また適当なものを全て選ばせる設問は難易度が高いが、受験者がよく準備してくる分野であることも踏まえ、全体としては標準的な難易度の大問といえる。

問 1 様々な思想家が用いた比喩や例えに着目した設問である。正文はおおむね基本的な知識といえるが、誤文は「(イエスは) 同胞愛を否定した」など一部の微妙な記述で誤りとしており、判別が難しい。標準よりやや難しい設問といえる。

問 2 ソフィストとソクラテスによる言葉に関わる活動に着目した設問である。基礎的な理解を問うており、標準的な難易度といえる。

問 3 イスラームについての知識と資料の内容を問う設問である。初見の人名が出てくるなど資料がやや読みづらいが、大意の読み取りは易しい。しかし、選択肢中の知識はやや細かく、天使を信じるのが「義務」と言えるかなど微妙な判断を求める記述もある。

問 4 様々な宗教や思想における言葉の役割についての設問である。「イザヤ」など細かい知識を含み、「信仰告白は、その文言を文字通り信じるという意味で」など分かりにくい表現もある。問 3 と同じく六信五行の内容を含んでおり、もう少しバランスを求めたい。

問 5 旧約聖書と新約聖書の記述をもとに、ユダヤ教・キリスト教の理解を問う設問である。ごく基本的な知識を問い、選択肢にも紛らわしいところがないため、平易といえる。

問 6 『莊子』からの資料と用語を結び付ける設問である。資料 1 と「無用の用」の対応は分かりやすく、あとは基本用語を区別できればよいので、やや平易といえる。

問 7 資料をもとに、イエスやブッダの教えに関する知識と資料中の例えの特徴を問う設問である。①の「神の国は、人間にとって「福音」だ」という表現が分かりにくいだが、資料の文章が読みやすいため、難易度は標準的といえる。

問8 比喩や例えを用いた思想に関する知識と会話文等の趣旨を問う設問である。選択肢の記述がやや細かく、例えばプラトンの比喩に出てくる馬や御者の翼の有無なども正誤判定の要素と受け取られるおそれがある。なるべくシンプルな表現としたい。趣旨をつかむのは平易であり、全体としては標準的な難易度といえる。

第2問 「秩序」について（日本思想）

日本思想における「秩序」に関して、高校生の会話、原典資料、絵画を通じて、考えを深めさせる大問である。調べ学習の振り返りや読書会など、生徒が自ら課題を設定し、解決を試みる学習場面が設定されていた。出題内容は古代、中世、近世、近現代とバランスがよく、難易度も適切であった。ただ、会話文を踏まえることなく解くことができる設問が多かったため、出題の工夫があることが望ましい。

問1 ①の藤原惺窩が仏教の出世間的な考え方を批判して還俗したこと、②の熊沢蕃山が山林伐採や新田開発を戒め、治山治水対策に努めたこと、③は林羅山ではなく伊藤仁斎の説明であることを踏まえると、④を選ぶことができる。ただ、新井白石がキリスト教の世界創造説について下した評価は教科書の範囲を超えており、判断が難しかったと思われる。

問2 人の霊魂が死後に山に向かう、祖霊信仰についての知識があれば、アは正文と分かる。また、現世と高天原が自由に往来可能であるとされたことを踏まえれば、イが誤りであると分かる。

問3 日蓮についての理解を問う、平易な設問であるが、正誤判断に迷う細かな知識も含まれていた。イの日蓮の四箇格言は他宗批判であり、念仏宗を無間地獄に落ちる教説として誹っているため、誤りであると分かる。

問4 二宮尊徳に関する原典資料の読み取りと、既得知識の理解を併せて問う設問で、平易ながら良問である。天道と人道で農業が成立すること、分度と推譲に触れた④が正解であると分かる。

問5 雪舟が描いた水墨画について交わした会話文に当てはまる、日本の美意識の特徴をあらわす記述を選ぶ設問である。幽玄の美が藤原俊成の和歌などにみられる点や、わびとさびの定義を踏まえれば、簡単に解答することができた。絵画資料を用いた点や題材は評価できるが、絵画鑑賞に即して解けてしまうため、選択肢に工夫を求めたい。

問6 内村鑑三について、その思想内容の定着を問う設問である。内村は無教会主義のプロテスタントで、イエスと日本という「二つのJ」に身を捧げ、日露非戦論を説いた。「武士道の上に接木されたる基督教」と述べたことや、『代表的日本人』を著したことを根拠に②を選ばせる出題だが、著書で取り上げられた人物名の正誤判断を細かく問うた点は難しかった。

問7 アは『貧乏物語』を著し、富者の奢侈廃止という人心改造で貧困を解決することを説いたマルクス主義経済学者の河上肇、イは大正デモクラシーを支える民本主義を説いた吉野作造に関する文章である。思想家についての基本的な知識を問う、平易な設問である。

問8 読書会において、初見の資料に関して高校生が会話する場面が設定されている。資料の内容を注意深く読めば、趣旨を踏まえていなくても簡単に解答できてしまう。日々の学習の到達度を測る意味でも、教科書で学んだ人間的な在り方生き方についての見方・考え方を活用する設問となることが望ましい。

第3問 対話と主体性について（西洋近現代思想）

「倫理」の授業における哲学対話の実践を切り口に、対話の有り方と主体性について考えさせる大問となっている。受験者が会話文や原典資料を通して対話について学び、対話が自己省察を深めたり、共同性を高めたりすることを理解し、対話の成立が共同的な主体性と個々の主

体性の両立につながることに気付いていくように大問全体が設計されている。その中で西洋近現代思想の思想家の原典資料や重要な用語を適切に配置し、基本的知識や読解力、思考力を問えるようにしている。高校生が主体性とは何かを対話を通して探究する構成となっており、「倫理」の授業者に対するメッセージも感じられる。ただし、設問の難易度にばらつきがあり、全体の難易度はやや高い。

問1 ベーコンの説く「4つのイドラ」についての基本的知識が問われている。

問2 キルケゴールについての基本的知識が問われている。

問3 ホルクハイマーとアドルノの思想について正誤が問われているが、選択肢アはフランクフルト学派の考え方であることは分かってもそれがホルクハイマーとアドルノの思想なのかどうかまで識別するのは難しかったのではないかとと思われる。

問4 パースの原典資料（資料1）を提示して対話について理解を深めさせた上で、資料2を提示して手がかりを与え、哲学対話の目的を考えさせている。しかし、選択肢が平易なため、資料の読み取りができなくても解答できる面がある。

問5 デカルトの思想とエピソードについて問われている。方法的懐疑や物心二元論を正しく理解していれば消去法で解答できるものの、評伝にあたる内容が正答となっており、難易度が高い。

問6 フロムの思想についての基本的知識と資料の読み取りを組み合わせる設問であるが、対話について受験者の理解が更に深まるように原典資料が精選されており、良問である。

問7 ヘーゲルが唱える絶対精神について正しく理解していれば解答できる。

問8 ここまでの会話文や原典資料で哲学対話の趣旨を確認し、対話について理解を深めさせた上で、対話をもたらすものを問う設問となっており、大問全体の趣旨問題にふさわしい良問である。

第4問 「行為の是非と意図」（青年期・現代の諸課題）

現代の諸課題について、「行為の是非と意図」という観点から生徒の会話や資料を通して多面的・多角的に思索を深めさせる大問である。前半では知識を問う設問が出題されており、後半では思考・判断・表現等を問う設問が出題されていた。やや難易度の高い設問もあるが、出題範囲はバランスが良く、全体としては標準的な難易度である。

問1 適応と防衛機制に関する標準的な設問であり、それぞれの特徴を理解していれば問題はない。

問2 環境問題に関する思想家についての基本的な設問であるが、環境問題を取り扱う思想家は数が多く、混同してしまった受験者がいたと思われる。

問3 サイドのオリエンタリズムについての理解を問う設問である。知識ではなく、選択肢の説明だけでも解答を絞り込むことができるため、選択肢の例に工夫が欲しい。もしくは、他の思想の説明をいれる等の出題形式も考えられる。

問4 終末期医療についての説明の正誤を判断する基本的な知識を問う設問である。

問5 ベルクソンとシュヴァイツァーの思想の内容について理解が問われた設問である。両名の思想に関する確かな知識が必要になり、やや難しい設問である。

問6 シュプラングァーの類型論とビッグファイブの特性論についての理解が必要になる設問である。この範囲は似たような内容が多くなるため、知識が混同しやすく、難問である。

問7 資料と図から空所に入る記述を判断する設問である。資料と図を丁寧に読み解き、論理的な思考を用いれば解答できる。知識を前提とするものではないが、倫理的思考を身に付け

るためにもこのような設問は必要である。また、今回の設問では「テロリスト」、「犯罪者と一般市民」で分けをしている。使用する資料と、その提示方法については慎重を期する必要がある。

問8 アンスコム の資料を読み取り、それに関する説明の正誤を判断する設問である。資料、説明とともに高い思考力・読解力が求められる。資料ではデカルト心理学とアンスコムの思想の識別が難しく、上手く読み取れない受験者もいたのではないだろうか。

問9 第4問をまとめる趣旨問題である。リード文やⅡの資料「二重結果原則」だけでなく、他の設問とも関連付けられており、大問を包括的にまとめる趣旨問題として適切であるように思う。受験者に大問全体を通して思索を深めさせようとする出題者の意図が感じられる良問である。

3 分量・程度

試験問題は、大問4問、総設問数33問で昨年と同様であり、適切な設問数である。大問、設問によっては読み込む資料の分量が多いものもあったが全体としては適切な分量であった。各大問はバランスよく幅広い分野が出題内容として取り上げられていた。標準的な難易度の設問が多い中で、教科書での扱いが少ない事項が出題されている箇所や、資料の読み取りが難しい設問もあったが、全体としての難易度は適切である。しかし、資料問題の中には、知識を必要とせず読解だけで解答することのできる設問や、資料と設問に関連の薄いものもあり、出題方法は工夫が必要である。また、大問の構成の中には知識と思考力等についての設問が明確に分かれている部分もあった。知識に会話文や資料等を組み合わせ、知識を前提とした思考力等を問うことができるよう工夫されたい。全ての設問について知識・思考を組み合わせる必要はないが、大問の構成には今後検討を要する。

4 表現・形式

各設問の文章表現・用語について特段の問題はなかった。絵画資料を用いた意欲的な作問があり、設問形式も工夫されていたが、ほとんどの受験者が容易に正答できる選択肢になっており、もう一工夫ほしい。その他、図表の扱いは適切であった。ほとんどの大問・小問が高校生の間の会話文を基点とし、そこから原典資料の読み取りや読書会、さらには哲学対話へと活動が広がる構成となっており、「倫理」で求められる本質的な学習活動を幅広く登場させた設定といえる。適当なものを全て選ばせる形式や組合せとして正しいものを選ばせる形式は、正誤の詳細な判定を求めることになり、扱う知識事項を基本的なものに限定しないと難易度が高くなることに留意してほしい。全体を通して、どの受験者も学んでいる基本的な知識に対して、教科書にあるような説明とは違う切り口で捉え直すことで理解の質を問う問題が多く、「倫理」の学習の有り方に対するメッセージとなっている。

5 まとめ（総括的な評価）

豊富な原典資料に加えて、生徒同士のメッセージ、絵画、哲学対話の会開催の趣旨説明、調査の結果と考察も設問の題材として用意されており、受験者の基本的知識だけでなく読解力や思考力を問おうとする意欲がうかがえる。ただ、設問によっては資料の読み取りだけで解答できるものや、逆に資料を読み取らなくても解答できるものもあったので、基本的知識と資料の関連性を高める工夫を求めたい。また、全体として資料の量が多く、見開きで完結しない設問もあり、受験者が資料に基づいて深く考えるより資料を要領よく読みこなすことを求められる面があった。資料が効果的に活用され、受験者の理解や思考を深める設問も複数あったので、さらなる資料の精選と活用の工

夫を期待したい。授業での探究的な学びをきっかけにして、生徒同士で図書館を活用したり、自主的に読書会や哲学対話の会を開催したりする過程を踏まえて設問が構成されている点等に、授業者や受験者に探究型授業や主体的な学びの実践を求めるメッセージが読み取れ、高等学校等における授業改善に資する問題作成であったといえる。